第三部・総合討論

本稿は、令和5（2023）年1月17日に久慈地方森林組合会議室で開催したワークショップ「未来にアカマツの文化と生業をつなぐ」における講演（第一部「岩手県のアカマツ」、第二部「アカマツを活かした生業」）を受けて行われた第三部「京都のアカマツ」の概要、「総合討論」の内容を編集し、収録しました。

【第三部「京都のアカマツ」（概要）】

講演者：深町加津枝（京都大学）・三宅徳彦（鞍馬火祭保存会会長）・三浦公三（鞍馬火祭保存会副会長）・滝川弘次（鞍馬火祭保存会・氏子総代）

「京都の伝統文化を支えるアカマツ」深町加津枝（京都大学）

京都には、昔から大切にされてきたアカマツの文化、そして今も継承されているアカマツの文化があります。吉田山や嵐山が描かれた江戸時代の絵図には、名勝地の景観の重要な要素としてマツが描かれていました。絵図・絵葉書に描かれた風景には山、里、水辺が一体になっており、そのどこかにアカマツが存在していましたが、現在はほとんどマツがない状況になっています。京都の

年中行事をみると、山との関わりが深いことがわかります。祭りの神事の日時・どのような素材を使うかを調べてみると、アカマツが利用されていることがよくわかります。大文字山の送り火を支えているNPO法人大文字保存会の長谷川さんはアカマツを集めるのに精力的に活動されています。材をどのように手に入れ、行事を行っていくかが問題になってきています。またマツ上げや、鞍馬の火祭も、アカマツを含めたさまざまな森林資源を調達に使用しています。材料のこだわりとその変革を考えないといけない部分があり、樹種の性質とその意味、材料の不足、人手不足、山の環境の変化など多様な課題があります。受け継がれてきたものの継承が困難になってきており、難しい課題ではあるが、文化や生業も含めたアカマツのこれからについて考えていきたいと思います。

「鞍馬の火祭におけるアカマツの利用について」
鞍馬火祭保存会

京都の中でも特にアカマツとの関わりが深い地域として、鞍馬火祭保存会の三宅氏、三浦氏、滝川氏よりお話いただきました。鞍馬の火祭では、松ヤニが多いアカマツを「ジンマツ」と



ワークショップ第三部の様子

呼び、「甲斐性松」「手松明」「神楽松明」など様々な松明の全てに、ジンを使用しています。水分が多い松ヤニではなく、蜂蜜のようなどろっとながれる松ヤニが多いマツを「肥えたマツ」と呼び、重宝しています。なぜ肥えたマツしか使わないかというと、松明は神様をお迎えするときに消えてはいけないため、雨が降っても消えない肥えたマツが必要とされています。アカマツは、地面から40〜50cmほどまでしか使いません。上に行くほどジンが少ないためです。根に近いところにジンが多い。しかし、そういうマツがなかなかない状況になっています。子どもたちと松明をつくる会を開き、松明づくりに必要なアカマツやフジツルなどを触る機会を作っています。

【総合討論】

深町加津枝（以下、深町）：

第1部、第2部では、岩手県のアカマツの文化が今日も生きた文化として、生産・流通・消費がつながる事例をお聞きしました。第3部として、京都市鞍馬か



鞍馬火祭保存会より右から三宅氏、三浦氏、滝川氏

ら鞍馬の火祭を担う3人の皆さんに来ていただきました。京都においても、伝統行事、生活文化を語るにおいて「アカマツ」は不可欠であるのですが、近年マツ枯れの被害があまりにも大きく、アカマツが減少し、山の様子も変わってきています。生業として林業をしている人もわずかになってきています。今回、京都と岩手県久慈地方、双方のアカマツに関わる文化について語り合い、何かでつながれないかと思い企画しました。今日の集まりをきっかけにアカマツの利用を通した交流ができればと思います。感想やご質問をご自由にしていただければと思います。

中村克典（森林総研）：

ジンの入ったマツがすごく重要な部分だと思うんですけれども、取るのが難しそうだなと思っていてですね。私の場合、病虫害の関係をやっていると、先ほどの話で、木に虫が穴を開けたところの近くに菌がいっぱい集まっているというのがあったのですけれども、やっぱり虫が穴を開けたところとか、それからカビで少し腐れが入ったところ、そういうところの近くはけっこ



鞍馬火祭の松明

うヤニが集まりやすい場合が思うんです。ヤニは木の防除に対して出るものなので。それを作るわけにもいかないのですけれども、そういうところを目印にして探すのがあるのかなと思ったのが1点です。それから、根っこの方で油が多いところを見かけることがよくあって、昨日見たのでは、根っこよりもむしろ枝の方が多かったという話なのですけれど、根っこの方でも結構出ることが多いのかなと、個人的に印象としてあります。質問ですが、皆伐した時の抜根が使い道がなくて、逆に困っているようなところかなと思うんですが、木を伐った後の根っこをほじくり出したところで、ヤニが多い部分があったら使ってもらうこともできるものなんでしょうか。

滝川弘次（鞍馬火祭保存会）：

その根が一番良いところで、そこが一番欲しいんです。山へ行って掘って、それを持って降りる作業が本当に大変なんです。こちらみたいに山が平坦でないので、取りに上がるだけでも大変です。今でも山にはその根が残っていると思うんです。重機で掘ってもらって、良いところだけ取らせてもらえるというのは、これは最高のことです。

三宅徳彦（鞍馬火祭保存会）（以下、三宅）：

私も若い頃は年寄りに習って、尾根筋のマツの伐採をした後、14、15年たったらもうジンになっているからお前取ってこいと言われて取りに行ったんですけれども、担いで下りるのにずしっと重たいんです。同じ太さだったら普通の材の三倍ぐらい重たいですね。山が急なので上から放り投げて、それを持って下りていました。持って帰ってきたら、昔の人は縁の下に入れていたんです。そうすると10年経っても20年経っても、とりあえず割らなかったら油分が流れないから。10年以上小屋の中に入れていて、この間もやっぱり重さはほとんど変わっていなかったで

す。もう今は、根っこを掘る人は誰もいなくなって、枯れたマツのジンが残っている部分を探して、それを持って帰ってくるパターンが増えてきました。ところが、松くい虫が蔓延って、今やそれも段々なくなってきていました。以前、深町先生に岩手で撮った平らなところにマツが林立している写真を見せてもらいました。鞍馬やったらスギ・ヒノキがほとんどで、尾根筋にマツがパパッとあるのがほとんど枯れていると。以前はマツタケが出たけど、今はほとんど取れないと。その写真を見せてもらったらびっくりしましたね。目を奪われたというか。一回来てみたいなということで、来させてもらいました。大粒来さんの現場を見せてもらって、雪の中やっておられるし、なんで雪のこんな時期にやっているのかと聞くと、材が一番良い状態の時に伐っているんやという話も聞かせてもらって、いろいろ勉強させてもらいました。やっぱりここの人はマツに対して思いが深いなと思いました。うちの家も梁にはマツを入れるんです。京都は昔からそういうのもありますので、マツとの関係も深いです。祭りもジンマツだけではなく、かがり火にはマツを燃やします。それも今は段々となくなってきた



鞍馬火祭保存会の皆さんは久慈市の林業現場を訪れました。写真は丸大農林林業の現場

ので、僕らはNPO法人大文字保存会と一緒になってよそのところへもらいに行ったりとか、NPO法人大文字保存会が伐ったマツの使えないところを、割木に節がいっぱいあって曲がっているところをおいてくださっているのでいただきにいきます。それをかがり火にすると。そんなところなので、アカマツとの関わりはずっと深く持っているので、昨日からずっと見させてもらって、感激することが多いです。本当にありがとうございました。

沢口敬志（久慈地方森林組合）：

アカマツのヤニのあるのというと、やっぱり岩山に生えている年齢が100年以上のというものであれば、お盆の送り火・迎え火に使うものは、ほとんどマツの根っこを掘っていますので。ただ、固い岩山に機械を入れて山を掘るというのはちょっと難しいのかなと思っているんですが、ないことはない、あることにはあります。あとは値段次第です。

全　：笑

参加者：なかなか材料の調達が難しくなってきているという地域の実情が含まれるというところでございます。集まりにくいということから、お金を出してそれなりに近隣から調達するような形になるんですかね。そうなると地域の伝統文化の継承という意味では非常に危惧されるところがあるのかなと思います。値段次第というお話をいただきましたけれども、なんとかそういう調達可能なところで頑張って取り組んでいただければ、伝統文化の継承に繋がっていくのかなと思いますので、遠くから応援していきたいと思います。

参加者：私は岩手県の内陸の出身なので、沿岸の方の宮古には「盆松」と言ってお盆にマツを燃やす習慣があります。こちらにもジンを使う文化がないことはないですよね。

三宅：そうですよね。深町先生からこちらの道の駅ではジンが売っていると聞いて、とても驚きました。一回行ってみたいなと思って、どんな人たちがどのように使っているのかって興味津々でした。

参加者：私も使わない地域出身なので、不思議でしょうがなかったんですが、習慣としてそういう伝統があるので、岩手県には。私は伊達藩の人間なので、そういう習慣がないんですが、ジンを出せるんじゃないかなと思って聞いていました。

参加者（久慈市役所）：本日は大変参考になる様々な情報を聞くことができました。ありがとうございます。一般的にはヤニ、嫌われる部分なんですよね。ところが京都の鞍馬の火祭では、その部分が重要、欲しいんだと。そこの着眼点というか。一方、こちらではいらない、他方ではその部分が必要だと。今、そのマッチングというか、そこが非常には興味ありまして、探せばいらないものが必要な人もいるんだなというのを改めて感じることができました。ここの部分が、値段もあると思うんですけれども、うまくマッチングすれば、国内の中でいろんなものが循環するんだなという部分を、私が今日気付いた点です。

話は逸れるんですけれども一点、この鞍馬の火祭に関してお聞きしたいことがあります。この火祭を行う時期をお聞かせください。合わせて、私は市役所の職員と同時に、地元の消防団で消防活動を行っているんですけれども、大量の火を燃やすわけですよね。すごく心配な部分がありまして、これは住宅火災だとか山林火災に発展しないのかと。まあ住宅もそうですけれども、山林火災というのは我々にすると、絶対にそれはあってはならないことなんですね。そういった防火、

火災の対策についてどのように行っているのか、時期とこの火事の対策、この2点について教えてください。

三宅：お答えいたします。時期は10月22日の夜です。朝のうちに礼祭をして、夜6時から「神幸祭（しんこうさい）」が始まります。終わるのが12時です。昔は旧暦では9月8日・9日に行なっていました。明治維新で、新暦ができたので、それと同じ時期に合わせると、新暦の10月22日・23日です。今は1日だけの祭りになりました。もともとは夜に山の中にあるお宮さんから鞍馬寺の中腹に神輿を降ろしてきて、御旅所で1日お休みいただいて、23日の夜中の12時半にまた「神事ぶれ」があります。そこから23日の祭りが始まるんです。朝までかかってお神輿は神社にお帰りいただきます。次に火の問題を申しますと、鞍馬は宵宮祭が16日と、祭日の6日前に行います。また「火改め」という日が19日にあります。何をするかというと、竈の灰を綺麗に掃除して、家の周りに燃えやすいものがあったら全て綺麗に掃除するんです。僕らが子どものころには、まだスギ皮葺の家がありました。しかも樋がタケでで



鞍馬火祭　かがり火や松明のアカマツに火が灯る

きている家が残っていました。今は各家はカゴにかがり火を燃やしますけど、僕らが子どものころはマツや川に流れてきた流木の根っこなどを持ってきて、道の真ん中で火を焚きましたから、今より火は大きかったです。それでも火事は1回も起こしていない。それはやっぱり19日の日に「火改め」という日をわざわざ設定していることがあるのかなと思います。火に対する心構え、それから扱いが非常に慣れているし、丁寧やし、神事なので余計に慎重に、神様にご奉仕する日やから、絶対に火事を出さないようにという自負があったと思うんです。だからすごいやかましいです。各家の前に防火用水をおいてくださいというのは、とても厳しく言われています。祭りが終わった次の日は家の中は煤だらけです。うちの奥さんは、1週間拭き掃除しても毎日床が黒いってぼやいていました。もうこんなにしんどい祭りはないわと。ところが、自分の子どもができて、祭りに出したら、お客さんほったからして、祭りに子どもと一緒に出ていくようになりまして。そういうような熱狂的お祭りなので、みなさんご心配



鞍馬火祭

されるんですけれども、今までぼやひとつ出していないんです。それがまあ鞍馬の自慢でもあり、誇りだと思います。ご心配いただいてありがとうございます。

参加者（久慈市役所）：

よくわかりました。当日の部分だけじゃなくて、準備もあるということで、それも含めての伝統文化なんだなということがよく理解できました。大変ありがとうございました。

三浦公三（鞍馬火祭保存会）：

私は消防職員なんです。火災の件は、当日は消防署、消防軍団も火祭対して特別な警備計画を作っていまして、もちろん人がたくさん来ますので、怪我、火傷など、警察も含めて特別警戒ルールで警備しています。そこかしこに小さい動力ポンプを置き、消防車も3台、救急車も1台きます。今まで火事がなかった。あれだけの大きい火でよく家が燃えへんなと思ったりもします。それはやっぱり鞍馬の人の心意気がね、三宅会長も言っていましたけど、神さん事なので粗末には扱えないので、丁寧に扱って、その賜物かなとも思ったりもしています。ありがとうございます。

参加者（県立博物館）：

博物館で学芸員をしております。今まで林業と関わりのある仕事というのはなかったんですけども、吉田先生・深町先生から岩手県のアカマツにかかわる生業について、博物館には情報はないですかというご相談をいただいて、それをきかっけに今回参加しました。知らないことばかりで大変勉強になっております。ありがとうございます。

私は野生生物、植物の担当で、主にその辺に生えている雑木あるいは雑草が専門なのですが、今までのお話を伺って、岩手の文化やお祭り、民俗などと、植物あるいは生き物全て含めて、すご

く深く関わっているんだなということを改めて認識しました。今、鞍馬のお祭りのお話を伺いましたけど、岩手でも似たようなお祭り、アカマツを燃やすお祭りがいっぱいあるんですよね。地域によってはお寺や神社で森を持っていて、そこからアカマツを伐っていって燃やしているというお話も聞いていますが、自分たちで伐れなくなって、材木屋さんから買ったものをお祭りで燃やしているという話も伺っています。今回、時代の変化で、お祭りの形も変わってきてしまうというお話も聞いたりしましたが、色々考えさせられることがすごく多いワークショップでした。今後も是非いろいろ教えていただきながら、野生生物あるいは山の木と文化について考えていければなと思っているところです。どうもありがとうございました。

深町：ありがとうございました。ぜひ博物館のいろんな取り組みとか、民俗学的な植物のことなど色々教えていただきながら、私たちのプロジェクトを進めていきたいと思います。



アカマツのジンとツヅラフジでつくられた小さな「手松明」

参加者：　今日改めてアカマツの色々なお話を聞かせていただきました。私は住宅の仕事に携わっていまして、木材を扱っているのですが、アカマツ材のことを知っているようで知らなかった。この地域だと先ほど話がありましたけれども、お盆のときにマツを焚くと。最近、ホームセンターなどでマツを買うのですが、燃えないですね、なかなか。ああ、そういうことかと、改めてアカマツのことを勉強したなという思いがあります。昔は火をつけるとすぐ燃えた気もするのですけれども、最近は火をつけても1回や2回は必ず消えてしまうのですね。これ送り火や迎え火になるのかなと思いながら家でやっていました。今度買うときはちゃんと物を見て、アカマツを買うようにしたいと思います。いろいろと勉強になりました。ありがとうございます。

参加者：　私は長年にわたって間伐といって、森の整備をする仕事を続けてきました。その中で、大事に木を、アカマツを中心に育ててきていても、やはり山主さんの意向によっては、育てたいと思うような年数や太さになる前に売ってしまうような木もあるんです。最近では、大体の出荷先は合板工場が多くなっていて、合板工場でも機械の規格によってはこれ以上の太さ以上のものは持ってくるなというふうに言われたりするんです。かと言って、そういう木を用材用として出荷しても、あまり高く売れないような状況もありまして、泣く泣く砕いてバイオマスとか製紙用材として売るような場合もあります。こういう風に根元の松ヤニの多いところ、地上40cmから50cmまでのところを使ってくれるということで、もしかしたら我々の地域でなかなか使えないようなところを使ってもらえることができるのかなと思って、ちょっと明るい希望になるなと思いました。勉強になりました。ありがとうございました。

日當和孝（マルヒ製材）：

今まで当社は、今お話しされたのと同様で松ヤニをいかに削除するかということをずっとやってきたんですが、今回松ヤニがいいんだというふうなことをお聞きしまして、本日、鞍馬火祭保存会の方に当社へお越しいただきました。根っこのところが非常に良いジンが取れるというふうなことは、三宅さんたちからお話を聞いたりしながら承知していたんですが、根っこところをいかにコストをかけずに回収できるかとか、用材にするかというのは、大粒来さんからお聞きしてもなかなか難しいだろうというところがありました。大粒来さんと相談しまして、もしかすればジンの部分が多いマツの枝が活用できるのではないかということで、今日大粒来さんに無理を言って、マツの枝を持ってきていただきました。小口を見た時に、非常に節の部分が多いというところを剪定していただいて、当社の方で見たらば使える部分が若干あるというところでした。４ｔ車一杯分のマツの枝を持ってきてもらったんですが、その中で何本かは今でも使える、この枝は10年後にも使えるという高評価をいただきました。また、こういった製材所ではあまりいたくない木ですね。また、こういうふうなものが非常に面白がって、興



ジンが含まれた材を持つ日當氏


アカマツの枝にジンが入っている

味を持って見ていただきました。こういったものが普段の製材所ではあまり使うことがないんですが、こういったものが使えるということで、我々が使えないものが、鞍馬の方では大事にお使いいただけるかもしれないという可能性、これは非常に面白いなと思っておりました。そういった意味で、京都とそして久慈と、ちょっと離れてはいるんですが、これを機会に、いろんな取り組みができればよろしいのではないかなと思っております。アカマツが全国に向けて売り出しをいっぱいしていたんですが、思わぬところでアカマツのつなぐ縁というものができたのではないかと思っていて、本日のアカマツワークショップは大変皆様にとりましても営利な会になったと思いまして、最後にコメントをさせていただきました。ありがとうございます。

深町：皆さんから色々と貴重なご意見をいただきましたし、それぞれの第1部、第2部、第3部でお話ししていただいた方々の話が、まさに未来にアカマツ文化の生業をつなぐということでとても大事なお話だったなというふうに改めて感じております。さまざまな課題があると思うんですけれども、ぜひともですね、岩手久慈地方を中心とした地域と京都がうまい形でつながっていくように、皆さんのお力添えを可能な範囲で、無理をするとなかなか難しいので、お互いがいいような形で、どういうつながり方があるのか検討していきたいなと思っております。そういった中の微力ですけれども、私達のプロジェクトでも、これから長期的な視点で関わらせていただきたいなと思っておりますので、引き続きどうぞよろしくお願いします。本日は本当にありがとうございました。



「未来にアカマツの文化と生業をつなぐワークショプ」ポスター

岩手県のアカマツの文化と生業をつなぐために

京都大学　深町　加津枝

岩手県のアカマツの分布は、海岸線から標高800mまでの広い面積を占め、低標高域では主にコナラやクリと混生し、高標高域ではブナやミズナラが出現する。**図1**は、昭和54（1979）年の調査に基づく久慈市および洋野町の一部を対象にした植生図（現存植生図「久慈」、1981年環境庁発行）である。アカマツ林は、ヤブツバキクラス域自然植生となるアカマツ群落とアカマツ植林地に区分される。アカマツ群落は、海岸沿いや丘陵地、尾根筋などに小面積で点在している。集落周辺には水田や畑地が広がり、丘陵地ではコナラ群落やアカマツ植林地が大きな面積で分布している。

「侍浜松希少個体群保護林」（7.2ha）は、久慈市北部の侍浜地区に位置し、アカマツ天然林の保存、および林相・植生の推移を観察し学術考証とするために設定された（**写真1**）。林齢は150年で最も樹高が高いアカマツは32m、最大胸高直径は100cmほどであり、針広混交林（アカマツ87%、広葉樹13%）となっている（三陸北部森林管理署、2007）。保護林内の上層にはアカマツの大径木が林立し（**写真2**）、中〜下層にはコナラ、クリ、ホオノキ、ヤマボウシ、

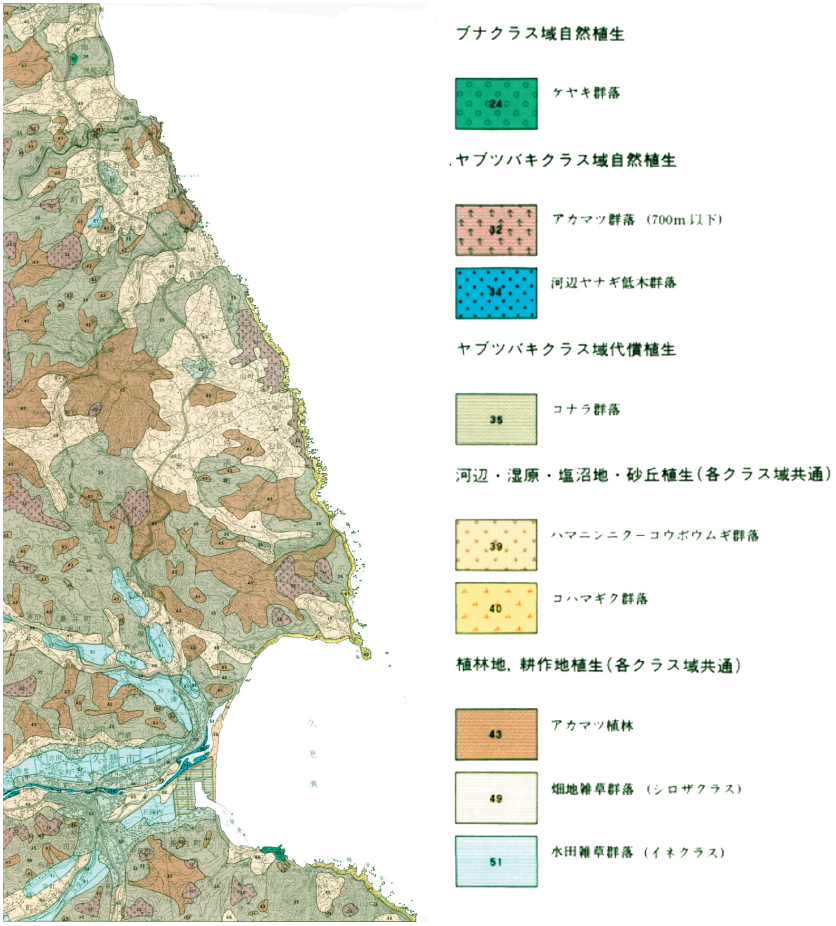


図１　現存植生図「久慈」（1981 年環境庁発行を一部編集）



写真１　侍浜松希少個体群保護林



写真２　保護林内のアカマツの大径木

オオバクロモジなどの木本約８０種がある。林床には、オクモミジハグマ、チゴユリ、ヒトリシズカなどの草本植物が１００種類ほど確認され、希少種や生物多様性の保全上で重要な森林となっている。

岩手県内の国有林には、「侍浜松希少個体群保護林」のほかにも、「松森山御堂松希少個体群保護林」、「一関東山松植物群落保護林」などのアカマツ天然林を対象とした保護林がある。侍浜地区の丘陵地帯に広範に成育しているアカマツ、「侍浜松」は、目が詰んで材が赤味を帯び、年輪がはっきりと現れ光沢があり、軽量で成長が早い。こうした優れた形質を持った岩手県のアカマツ材は南部アカマツと呼ばれ、古生層の丘陵地帯に多く、「侍浜松」、北上川源流部の「御堂松」（岩手町）、県南の東磐地方の「東山松」（一関市）が３大ブランドとなる。

アカマツ林は、地域の自然や文化と関わる



写真３　宮古市浄土ヶ浜付近の景観



写真４　浄土ヶ浜付近の歩道

景観を構成する重要な要素になってきた。三陸復興国立公園の拠点となる浄土ヶ浜では、アカマツ群落が白い岩肌とのコントラストとなった国立公園の代表的な景観を形成し（**写真３**）、歩道沿にはアカマツとヤマツツジなどの林内植生が一体となった景観が続く（**写真４**）。久慈川沿いでは、落葉広葉樹林が主体となる水辺林があり、尾根筋や岩角地にはアカマツ群落が小面積で点在する（**写真５**）。葛巻市内の里山では、畑地や放牧地の周辺にコナラ群落やアカマツ植林地、カラマツ植林地がモザイク状に分布し（**写真６**）、一関では水田に隣接してアカマツとコナラなどの広葉樹の混交林が見られる（**写真７**）。洋野町では、アカマツ植林地を対象とした林業の現場があり（**写真８**）、手入れされた林内では多様な動植物を確認できる（**写真９**）。

　アカマツ林の分布は、暮らしや生業のための薪炭利用や放牧など、地域ごとの土地利用



写真５　久慈川沿いからみる景観



写真６　葛巻市内の里山景観

と密接に関わってきた。本冊子において、谷内氏が指摘するように、岩手県では約100年にわたってアカマツが植え続けられ、天然林においても地域の人々が自然に生えてきたものを育成してきた歴史がある。今日においても豊富なアカマツ資源量があるのは、こうした歴史とともに、中村氏が長年取り組んできたようなマツ枯れから守るための調査研究や行政施策の成果があるからこそであろう。アカマツの主な用途は、薪、炭、松明、建築用材であり、江戸時代より「南部アカマツ」としての流通ブランドが引き継がれてきた。アカマツの大径材は、神社仏閣や民伝統的な木造建築において梁などとして利用され（**写真10**）、文化財の修復においても不可欠となってきた。アカマツ林には、マツタケなどのキノコ、タラノキなどの山菜、柴となるツツジ類、フジなどのツル植物などが分布し、食文化や伝統工芸、年中行事と結びついた様々な自然資源が利用されてきた。

今日、地元の企業による伝統的な技術の継承と革新を礎に、日本の木の文化、持続的な資源利用を支える様々なモノが生産されている。第二部「アカマツを活かした生業」の丸大県北農林（洋野町）、谷地林業（久慈市）、マルヒ製材（久慈市）、川崎製材所（一関市）による合板や集成材、松炭、リンゴ箱、木の紙（**写真11**）、窯業



写真７　一関の水田に隣接する混交林



写真８　洋野町のアカマツ林での林業

の燃料などへの利用は、企業独自の努力や工夫によって成立してきた。また、アカマツに関わる国、県、市町による行政施策が長年にわたり展開されてきた意義も大きい。岩手県内の「道の駅」などでは、木目や肌触りなどの特質を活かした家具（**写真Ⅰ2**）や碗（**写真Ⅰ3**）、お盆の迎え火のためのジンを含むアカマツ（**写真Ⅰ4**）も販売されている。最近では、木質バイオマスとして燃料や発電に使う事例が増加している。また、知勝院（一関市）では、アカマツ林を含む里山が自然再生や「樹木葬墓地」の場となり、新たな人と里山との関わりが創り出されている。

マツ枯れや、木材需要の減少、生活様式の変化などにより、アカマツ林を取り巻く自然、社会の状況は厳しく、課題も山積している。こうした中で、課題を解決するための社会連携の動きも見られるようになっている。知勝院では平成21（2009）年に「久保川イーハトーブ自然再生協議会」を立ち上げ、地域内外の人や行政と連携し、里山の生物多様性の保全などのための調査研究や事業を展開している。浄土ヶ浜のような名勝地だけでなく、アカマツ林そのものが環境教育、エコツアーなどの場（空間）として再評価あるいは創造していくことが重要となるであろう。また、日本全体において面積が激減している大径材を含む高齢のアカマツ天然林は、生



写真９　洋野町の手入れされた林内

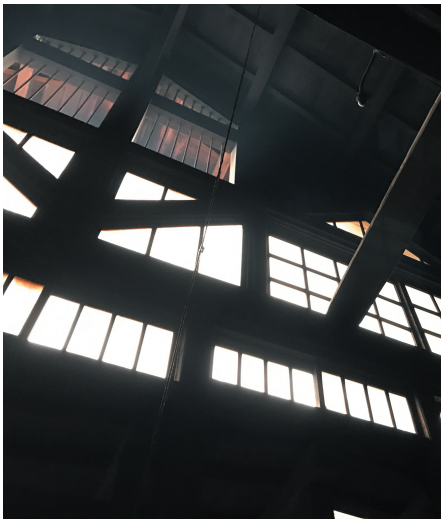


写真１０　アカマツの大径材を活用した木造建築

態系としての価値だけでなく、文化財の補修や祭事に不可欠な材の供給など、日本を代表する文化の継承においても重要な役割を果たす。次世代に向けた天然下種更新や天然林としての価値を高めるための持続的な管理、育成が求められる。

平成２９（２０１７）年に設立された久慈地方「木の仕事」協議会は、林業、木材加工、造園業などが連携して、林業・木材産業のＰＲや新規就業者の確保・育成を図ることを目的とし、高校生を対象に高性能林業機械の体験講座などを開催してきた。多様な主体の連携や普及・啓発活動は、アカマツの文化と生業をつなぎ、新たな仕組みを具現化するための手法の１つとなる。人的ネットワークとコーディネーターの存在、行政の適切な支援も不可欠であり、こうした積み重ねが地域文化を支える人・社会・自然のつながりを確かなものにしていくと考えられる。岩手県のアカマツ林、そして関わる人々の取り組みを、様々な角度、地域でつなげていくことが、日本のアカマツの文化、生業の未来に不可欠である。



写真 12　アカマツ材のテーブル



写真 11　「木の紙」の賞状
（2023 年度日本林業遺産認定証）
日本森林学会ホームページより引用



写真 14　ジンを含むアカマツの束



写真 13　アカマツ材などで作られた木工品

吉田　丈人（よしだ　たけひと）
所属　東京大学大学院農学生命科学研究科・総合地球環境学研究所
専門分野　生態学、陸水学
主な著書　『実践版！グリーンインフラ』（共編著・日経 BP, 2020 年）、シリーズ『地域の歴史から学ぶ災害対応』（共著・総合地球環境学研究所 , 2019~2023 年）、『プランクトンのえほん』（監修・ほるぷ出版 , 2017 年）など

深町　加津枝（ふかまち　かつえ）
所属　京都大学
専門分野　造園学、景観生態学
研究テーマ　地域固有の景観保全、活用のあり方、里山の人と自然のかかわり
主な著書　「身近な自然と風景～里地里山の再生による風景づくり」（西村幸夫ら編『風景の思想』, 学芸出版社 , 2012）、「森林に関する伝統的知識」「流域文化の継承」「伝統の継承と活用・土地利用」（日本景観生態学会編『景観生態学』, 共立出版 , 2022）

谷内　博規（たにうち　ひろのり）
所属　岩手県林業技術センター　研修部（昨年度の所属）
専門分野　木材加工、木材保存
主な活動　アカマツ材の利用に関する調査研究

中村　克典（なかむら　かつのり）
所属　国立研究開発法人森林研究・整備機構　森林総合研究所東北支所
専門分野　森林保護学、森林昆虫学
主な活動　マツ材線虫病をはじめとする森林病害虫の生態と防除に関する研究に従事。主な著書に『森林保護と林業のビジネス化：マツ枯れが地域をつなぐ』（共著、日本林業調査会、2019 年）、『最新・樹木医の手引き（改訂 4 版）』（分担執筆・共著、日本緑化センター、2014 年）、『Pine Wilt Disease』（分担執筆、Springer、2008）など。

大粒来　仁孝（おおつぶらい　きみのり）
所属　有限会社丸大県北農林
専門分野　林業
主な活動　造林・保育、伐採事業を行う。

谷地　譲（やち　ゆずる）
所属　有限会社谷地林業
専門分野　森林経営
主な活動　森林にある全てを利用すること

日當　和孝（ひなた　かずゆき）
所属　有限会社マルヒ製材
専門分野　木材商学、木質材料学
主な活動　大学で経営学を学び、東京の木材問屋で５年間修業後に帰省し家業の製材業に従事する。主に、新建材の営業を担いながら、地域の同業若手経営者と木材需要拡大活動、木づかい運動、木育に取り組む。木質バイオマスを活用した熱供給事業にも取り組む。

千坂　げんぽう（ちさか げんぽう）
所属　久保川イーハトーブ自然再生協議会
専門分野　五山文学
主な著書　『五山文学の世界 虎関師錬と中巌円月を中心に』白帝社、2002 年)、『樹木葬和尚の自然再生 久保川イーハトーブ世界への誘い』(地人書館、2010 年)、『さとやま民主主義 生き生き輝くために』(森の本、2016 年)

佐藤　良平（さとう りょうへい）
所属　久保川イーハトーブ自然再生協議会
専門分野　森林生態学
主な活動　2011 年、東京から岩手県一関市に移住。同協議会の自然再生事業に従事しながら岩手県環境アドバイザーとして自然環境学習の講師などを務める。地元紙､岩手日日新聞にて月２回連載するフォトエッセイ「里山スケッチ」は、2024 年で 10 年目。

王　聞（わん　うぇん）
所属　京都大学
専門分野　造園学、景観生態学
研究テーマ　地域固有の景観保全・活用のあり方、里山の人と自然のかかわり
主な著書　『地域の歴史から学ぶ災害対応 砺波平野庄川流域の散村と伝統知・地域知』(共著・総合地球環境学研究所, 2022 年)、『地域の歴史から学ぶ災害対応日本各地につたわる伝統知・地域知』(共著・総合地球環境学研究所, 2023 年)

謝辞

「未来のアカマツの文化と生業をつなぐ WS」では、ご登壇いただいた皆様、鞍馬火祭保存会の三宅徳彦様、三浦公三様、滝川弘次様、久慈地方森林組合の沢口敬志様、関係行政機関の皆様、ご参加いただいた皆様には大変お世話になりました。また、川崎製材所の葛西敏郎様、敏伸様には現地にて多くのことをご教示いただきました。ここに深く感謝の意を表し、厚く御礼申し上げます。

人間文化研究機構　広領域連携型基幹研究プロジェクト
「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」
地球研ユニット：自然の恵みを活かし災いを避ける地域文化研究

地域文化を支える人・社会・自然のつながり　Vol. 4

未来にアカマツの文化と生業をつなぐために

発行日　2024 年 3 月 25 日

編者　深町加津枝

発行　人間文化研究機構　広領域連携型基幹研究プロジェクト
「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」
〒 603-8047 京都市北区上賀茂本山 457 番地 4
Tel. 075-707-2100

印刷・製本　株式会社グラフィック
編集・校閲　大原歩　中井美波
装丁・DTP　島内梨佐

ISBN: 978-4-910834-41-2

写真説明

表　紙：モザイク状になったアカマツ林と広葉樹林地（洋野町）
裏表紙：上　侍浜松希少個体群保護林のアカマツ林（久慈市侍浜町）
　　下　久慈木材流通センターの集積するアカマツ材（久慈市侍浜町）